



Data

監督：ポール・ワイツ
 原作：アン・パチェット『ベル・カント とらわれのARIA』
 出演：ジュリアン・ムーア/渡辺謙
 /セバスチャン・コッホ/ク
 リストファー・ランバート/
 加藤亮

■■■ショートコメント■■■

◆日本が誇るハリウッドスター・渡辺謙が、ハリウッドの大女優ジュリアン・ムーアと共演！舞台は南米の某国。副大統領邸でのパーティにはソプラノ歌手のロクサーヌ・コス（ジュリアン・ムーア）が招かれていたが、彼女の歌を愛してやまない日本人実業家・ホソカワ（渡辺謙）の姿もそこにあった。ロクサーヌは治安も待遇も悪い南米の国に行くことを嫌がっていたが、「高額ギャラ」に吊られてつい・・・。

それはともかく、ロクサーヌの歌声が流れ始めると、突如そこに武装したテロリスト集団が！彼らが誰よりも人質にとりたかった大統領が所用のため(?)欠席していたのは誤算だったが、それでもテロリスト集団のリーダーは「収監中の同志全員の釈放」を要求し、コンサートの参加者全員を人質にとることに！

◆本作は、1996年に南米のペルーで起きた日本大使公邸占拠事件に着想を得たアン・パチェット原作のベストセラー小説『ベル・カント とらわれのARIA』を映画化したもの。同書では、交渉が平行線をたどり、長期化、泥沼化していく中で意外な展開を見せるテロリストたちと人質たちとの「人間的交流」が焦点になっているらしい。なるほど、それは面白そうだ。

本作では、元英語の教師をしていたという、教養にあふれすぐれた人間味を見せるテロリストのリーダーと、あえて危険な仲介役を買って出た赤十字の職員メスネル（セバスチャン・コッホ）がストーリー展開のキーマンになる。しかし、本作ではテロ事件、人質事件で最も大切かつ難解な「人質解放のための交渉」がテーマになることは全くなく、メスネルは「子供のお使い」と同じレベル！？また、ロクサーヌの歌声は、交渉が泥沼化する中で疲れ果てた人質やテロリストたちの一時の癒やしになるけれども、それ以上の役割は伺えない。したがって、その中では、日本が誇るハリウッドスター・渡辺謙の活躍舞台が

ないのも当然だ。

もともと、本作では、ホソカワの通訳で英語、スペイン語、その他何でもござれという語学の天才・ゲン・ワタナベ（加藤亮）が、本職の通訳のみならず、「テロ事件の中で咲いた恋」という思わぬ展開の主役として大きな存在感を見せるので、それに注目！

◆大量の人質をとって副大統領邸に立てこもったテロリストの要求をどこまで受け入れ、どう妥結するの？人質事件ではそんな交渉が不可欠だが、他方で、人質を傷つけずテロリストたちを一気に武装制圧するにはどうすればいいの？そんな作戦も不可欠だ。したがって、本作のようなケースではそれが最重要テーマだが、ポール・ワイツ監督は全然それに興味を示さず、ひたすらテロリストたちと人質たちとの人間的交流の姿を描いていく。

ロクサーヌの美しい歌声に、副大統領邸を取り巻いている警官や群衆たちと同じように、テロリストたちも人質たちも一時の心の安らぎを覚えたのは当然。また、そんな中、政府（大統領）側が水道ストップを中止したのは英断だった。しかし、交渉が泥沼化、長期化する中、ロクサーヌの歌唱指導を受けるテロリストの若者が登場したり、下っ端の女性テロリストとゲンとの恋が生まれたり、果てはロクサーヌとホソカワとの関係が「大スターと追っかけという関係」から、一気に「大人の男女の関係」になったりする展開は如何なもの？さらに、ロミオとジュリエット以上に敵対しているはずの、テロリストと人質の間で生まれた恋が、野外でのベッドシーン（？）にまで発展してくると、アレレ……。さらに、本作ラストでは、何とテロリストたちと人質たちが一緒にボールを追ってサッカーに興じているから、こりゃハチャメチャだ。しかして、本作冒頭に始まったテロ、人質、占拠事件の結末は？

◆弁護士は依頼者の委任を受けて法的紛争の処理のために動く仕事だから、依頼者との信頼関係が最も大切。人質、テロ事件での交渉人は、それ以上に政府（大統領）とテロリストの双方から信頼を得ていることが大切だが、さて、本作のメスネルは？たしかに、メスネルの努力はわかるし、メスネル以外の人材がいないこともわかるが、「もはや限界」と思われる状況の中、「もう少し交渉の時間をくれ」と政府（大統領）にお願いし、それが了解されたら、本当にしばらくは大丈夫？そんなバカな！それはヤバイよ！と私が心の中でメスネルに伝えた途端、スクリーン上は……？

◆本作は、新聞紙評でも、「豪華な顔ぶれを使い切れていないのが惜しい」とか「様々な人間模様を丁寧に描いているが、その分、映画の性格がぼやけたのが残念」と書かれている。私もそれは同感である上、ハッキリ言って、本作はせつかく渡辺謙とジュリアン・ムーアを共演させてもそれを全く生かせなかった失敗作、だと言わざるを得ない。

2019（令和元）年11月22日記